

最近の米国幼児教育誌より

ここに最近の米国幼児教育誌
Childhood Education より、いくつかの論説を簡単に紹介して、外国の書物にたやすく目をふれることのできない読者の参考に資することとしよう。

一九五七年一月号は、「能力が必要である」という特集で、「子どもが能力をもつことによって自信を得、情緒的安定がえられるから、能力をあたえることの重要性を強調している。その中でも特に、人間関係の能力の必要が強調されているので、この点を少し詳しく紹介しよう。

よい人間関係を維持するのに大切な要素は、自分自身をうけいれることと、他人の働きを相応に評価することである。それは実際の教育の場ではどのようにして実現されるだろうか。

(1) 教師自身が子どもの生活に参加する

と。・われわれ自身が、保育室や教室の環境にどのように役立っているかをみつめるところからはじまる。子どもたちがわれわれをみているとしよう。われわれ自身は、子どもからみたとき、熱心に子どものことに興味をもち、愛情をもって見まもつているように映っているだろうか。それとも無関心なげやりな態度に見えるだろうか。

・助力が必要なとき、教師は助力をあたえる。膝の上に坐りたがる子どもがいたとき、一、二分抱いてやって、不安を和らげてやることによって、人間関係が向上する。

・教師は自分のために行動しない。教師は能力も言語もすぐれているので、子どもに

優越感をもって、教師の満足と便宜のため

に活動しがちである。・教師は子どもの考

えに反応する。子どもが見て感じているこ

とは、保育室や教室の動きに重要である。

・教師は子どもの質問をまじめにうけとる。子どもは自分のたずねたことがさげすまれ、相手にされないと、自分を相応に評価してもらえたかったと感じる。要するに

教えるということとは、子どもが計画し、実行し、評価することを助けることなのであって、指揮し命令することではない。

(2) 子どもが、自分自身をうけいれるようになること。それには次のような点が重要である。・ひとりひとりの子どもが自分が必要とされていることを知ること。途中から入ってきた子どもの扱いかたなどは特に大切である。・社会的に望ましい行動を強調し、望ましくない面はむしろ小さく扱う。・子どもの優劣を比較しないこと。・子どもの望んでいることや恐れていることをじゅうぶんに話しあう機会をもつこと。

(3) 他の子どもを受け入れることをすすめること。それにはいろいろな方法がある。

・子どもたちがお互いに知り合うこと。クラスが直面している問題について話し合う機会をもつこと。ただし、教師が、お互いの理解を助けるようむけていかなければ、かえって誤解や偏見をつよめることにならう。・集団の仕事や遊びを利用する。順番を

守り、リーダーになり、また役割をうけもつてあそぶなどの対人関係をまなぶ。・他の国に住むひとびとのことを知る。他国人を恐れることなく、他国の人から話をきいたりする機会をもつこと。

一九五七年二月号には、「チームワークが重要である」として、教師と親と子どもと校長・園長とが相互に意志の疎通をして、理解し合うことの重要性が強調されている。教師と親とが話し合う機会をもち、親と子どもが話し合う機会をもつ。また、教師と教師とが互に話し合う機会を持ち、校長・園長と教師、校長、園長と子どもも互に話し合う機会をつくることが必要である。これは小学校の例であるが、ある小学校で極端に早く登校する子どものことが問題になつた。そこで教師と校長とは親に協力を求めて、早く登校する子どもの理由を協力調査することとなつた。十名の上級生が面接者として委員会を構成し、五名の教師が研究を推進するための委員会をつくり、五名の教師が研究を助けるための委員

会をつくり、親と校長とが家庭との連絡のための委員会をつくり、こうして研究調査がすめられた。直接は二週間の間に五日間おこなわれ、その結果について討論がおこなわれた。調査は目下続行中で、対策についての検討がなされている。これも小学校の例であるが、小学校の一年から三年まで学年別を撤廃した学校の例が報告されている。この学校では、どの子どもも能力を超えて学習することを要求されない。もちろん落第しないが、優秀な子どもは二年間で、発育の少しおくれた子どもは四年間でこの課程をおえる。組編成は、社会的情緒的成熟と、読むことのレディネスを標準にして、できるだけ等質のグループにわけられるが、それぞれのクラスは、能力によつてさらに三つのグループにわけられている。しかし一年二年三年というような学年の区別はないのである。小学校というと何から何まで形にはまつたものと想像し、形式にはめなければ小学校でないようと考えること、考へてることを鋭敏に察するところである。第二は、子どもに成功感をあたえることであり、それによって、自信をつけることができる。

た組織について読むことは愉快である。

三月号は、「自分自身について、健全な考え方おこなわれ、その結果について討論がおこなわれた。調査は目下続行中で、対策についての検討がなされている。これも小学校の例であるが、小学校の一年から三年まで学年別を撤廃した学校の例が報告されている。この学校では、どの子どもも能力を超えて学習することを要求されない。もちろん落第しないが、優秀な子どもは二年間で、発育の少しおくれた子どもは四年間でこの課程をおえる。組編成は、社会的情緒的成熟と、読むことのレディネスを標準にして、できるだけ等質のグループにわけられるが、それぞれのクラスは、能力によつてさらに三つのグループにわけられている。子どもは自分自身を受けいれ、理解してゆくことによって、適応した幸福な生活をすることができる。子どもが自分自身をうけいれ、自分自身を好むようにするのに、教師のすることのできることが二つある。

第一は、教師が子どもと個人的に知ることであり、それによって子どもの感じていること、考へてることを鋭敏に察するところである。第二は、子どもに成功感をあたえることであり、それによって、自信をつけることができる。

この号にはさらに、小学校一年生の教師が、幼稚園から来た子どもをどのように評価しているかについて簡単な調査をした結果が報告されている。二十六州の一五〇名の小学校一年生の担任教師に質問紙が送られ、社会的情緒的適応、身体発達と健康、学習のレディネス、親と学校との関係の四項目について、幼稚園から来た子どもの方が、幼稚園を経なかった子どもよりも状況が非常によい、ややよい、まつたくかわらないというような三段階評価がなされた。その結果は学校による相違がかなりあるが、全体としてみると、幼稚園から来た子どもの方が状況がよい。すなわち、相異がないと評価したのは1—4%、幼稚園から来たものの方が非常に状況がよいとするもののが51—59%、ややよいとするもの40—46%である。

四月号は、「時間の調和がなければならぬ」という特集である。ある幼稚園の教師は、われわれはいったい何のために忙がしいのかと述懐する。早く手を洗いなさい、早く用意をしなさいと云つて、その次に来る

のは休息とおやつであるとは何という矛盾であろう。休むためにいそぐとは。もうひとつお話ししてとせがまれるとき、今日は時間がないから明日にしましようという。しかし明日も今日と同じように時間がないことはわかっているのだ。そこでこの教師たちは「ゆっくりとやる運動」をはじめた。誰も子どもをせかさない。それはなんと楽しい一日だったことよ。その結果何の不都合も出てこなかつた。時間は子どもの動きに合わせてゆけばよい。

他方、教師の過す時間をもう一度注意深く検討してみなければならない。一日の時間

を休息と、職業生活を満足にすごすための時間と、個人生活を満足にすごすための時間とにわけてみよう。それだけの時間をすごすということは、自分をそれだけのことに使つているということである。だからもっと賢明な時間のバランスを考える必要がある。

幼児の教育 第五十七卷 第四号

四月号 ◎ 定価 五十円

昭和三十三年三月二十五日印刷
昭和三十三年四月一 日発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内
編集兼

発行者 津 守 真

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内
発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五番地

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発行所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌の購読についてのご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。